公益財団法人 中村元東方研究所
東方学院

東方だより

第二十号

【本部 東京本校】
〒101-0021
東京都千代田区外神田2-17-2
延寿お茶の水ビル 4階
TEL 03-3251-4081
FAX 03-3251-4082
URL http://www.toho.or.jp

理事長ご挨拶

「中村元記念館開設にあたって」

前田專學

世界的なインド哲学・仏教学者である故中村元（東京大学名誉教授、文化勲章受章者）博士の半世紀に及ぶ学究領域は実に広大なものでした。古代インドを中心としたインド哲学、仏教学など東洋思想から西洋思想まで、また比較思想、歴史学などの領域にも及んでおり、時代としては古代から現代まで、地理的には日本、韓国、中国、インドからヨーロッパ、アメリカに至っています。

思索、研究の根底には人間生活への視点があり、視線の先には「人類」や「世界」がありました。代表的著作の一つに『世界思想史』があり、その最後は以下のように結ばれています。

「思想は種々の形で表明されるけれども、人間性は一つである。今後世界は一つになるであろう。…世界の哲学・宗教思想史に関するこのような研究が、地球全体にわたる思想の見通しに役立ち、世界の諸民族のあいだの相互理解を育てて、それによって人類は一つであるという理念を確立しうるにいたることを、せつに願うものである。」

博士の、学問を通じた世界平和への熱い願いが込められています。

また、博士は〝一番槍〟という言葉を好まれました。専門領域に閉じこもることなく、哲学、宗教がかかわる広範な分野に関心を持ち、自らの視点で幾つものテーマに果敢に挑戦されました。広いばかりではなく、批判を恐れず、どの領域においても斬新で、独創的・先駆的な研究を行ってこられました。

普遍の真理、真実を追う中で、博士が重要であるとされたのは、研究者それぞれの世界観の形成であり、そのために欠かせない学問、研究の「自主」と「独立」でした。

とりわけ、日本の哲学、思想研究については、専門領域の内に閉じ込もり、文献研究のみに陥りがちなことを強く懸念し、一九八八年の比較思想学会十五周年記念大会では、『奴隷の学問を乗り超えて―比較思想における挫折と実現』と題した特別講演を行われ、今の世の中で、比較研究をするからにはグローバルな視点でやらなければならないことを話し、日本の学問領域におけるセクショナリズムを超えた研究の在り方―狭い縄張り根性を捨てて、自由に求め、自由に批判し合うこと―の必要性を説かれ、「自主的な学問を進めよう」と呼びかけられました。

博士の著された論文、著書は英語、ドイツ語など外国語によるものも含めて一五〇〇本に達します。主な著作は、『中村元選集（決定版）』（全三十二巻、別巻八巻）に収められています。博士の著作は、学問世界だけでなく、一般の人々にも大きな恩恵をもたらしました。それは難解な漢字、言葉が多く、縁遠い存在であった仏典や仏教辞典などを、日常的な現代日本語で表わすのに大きな努力を払われたことにあります。

成果の一つが、『ブッダのことば』『ブッダ最後の旅』など、一連の原始仏典の平易な言葉による翻訳です。いま一つは、三十余年をかけた『佛教語大辞典』全四巻です。

後者はすっかり出来上がっていた約三万語分の原稿が出版社で紛失するという事故を乗り越え、その後八年を経て完成されました。これらの著作は、その後も改訂増補が加えられ、いまなお多くの人々に読まれ、利用され続けています。

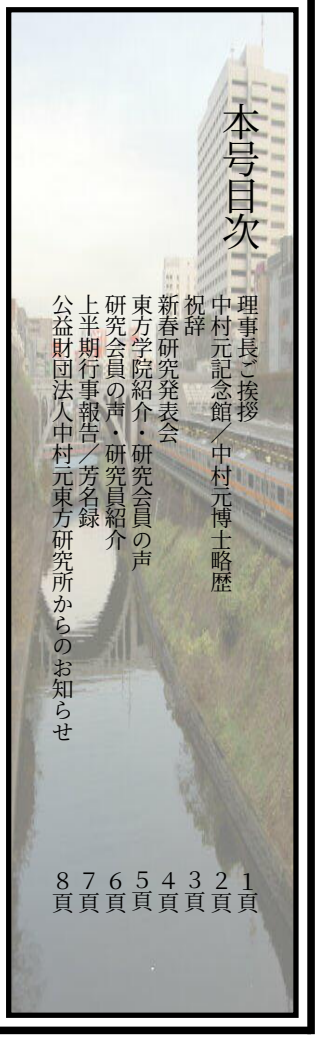
博士は生涯を通じて、学問の自由、普遍性を追い求める姿勢を貫かれました。東京大学を退官されると、学ぶ意欲のある人であれば誰もが自由に学ぶことのできる場として、公益財団法人中村元東方研究所（旧称：財団法人東方研究会）を母胎とする東方学院を東京・神田に設立。〝現代の寺子屋〟と称したここで自分の研究を続けられると同時に、運営し、教え、若い研究者たちの育成に努められました。

博士の人と思想を、私は『中村元の世界』のなかで、バニアンの大樹に譬えました。インド各地でみられるバニアンの木は一本の木でありながら、枝、気根を伸ばし、広大な森のようになります。大きなものだと樹冠は数百メートルに広がり、木陰が人々に憩いをもたらします。このように大きく広がる博士の世界を見渡した時、その思想、世界観の根幹にあったものは慈しみのこころ、すなわち慈悲でした。

自ら「ブッダに仕えた身」と言い、毎朝、自分の好んだ経文とことばを集めた日課経を唱えられた博士は、最晩年に、自ら建てられた墓碑に、ブッダの慈悲の教えである「一切の生きとし生けるものは、幸福であれ、安穏であれ、安楽であれ…」の文言を刻まれました。

博士が究められたのは、間違いなく奥深い学問―思想―の世界でした。しかし、それは誰にでも開かれた、一歩踏み入れれば、豊かな智慧と慈しみに触れることの出来る温かなこころの世界なのです。

二〇一二年一〇月一〇日



本号目次

理事長ご挨拶　1頁
中村元記念館／中村元博士略歴　2頁
祝辞　3頁
新春研究発表会　4頁
東方学院紹介・研究会員の声　5頁
研究会員の声・研究員紹介　6頁
上半期行事報告／芳名録　7頁
公益財団法人中村元東方研究所からのお知らせ　8頁

無断転載・複製を禁ず

編集・発行　公益財団法人中村元東方研究所

中村元記念館

設立：２０１２年１０月１０日

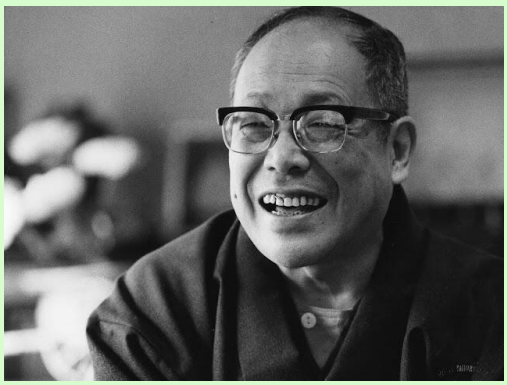
博士生誕１００年に合わせ、
命日の１０月１０日に開館

場所：松江市八束支所 ２階

〒690-1493
島根県松江市八束町波入2060

３万冊に及ぶ蔵書や研究資料、遺品などが展示
故郷・松江を中村元研究の拠点に
東洋思想・文化の新たな発信地

中村元博士 (1912-1999)　略歴



1912　11月28日、島根県松江市殿町に生まれる
1925　東京高等師範学校付属中学校入学．しかし腎臓の病気を患い一年間の休学、宗教・哲学関係の書物を耽読
1930　第一高等学校文科乙類入学．この時代の恩師との出会いは後の学問の支えとなり、友人との堅い絆は後の東方研究会・東方学院設立の礎となった
1933　東京帝国大学文学部印度哲学梵文学科入学
1943　『初期ヴェーダーンタ哲学史』にて文学博士
1951　『東洋人の思惟方法』が評価され、米国スタンフォード大学より客員教授として招聘、以後外国から受けた招聘は50回を超える
1954　東京大学教授に就任
1957　日本学士院賞恩賜賞受賞（『初期ヴェーダーンタ哲学史』）
1966　近代インドの思想家にしてインド第二代大統領ラーダークリシュナンより、「知識の博士」の 学位
1967　オーストリア学士院遠隔地会員．『佛教語大辞典』の原稿紛失、一ヶ月後再執筆開始
1970　財団法人東方研究会創立、理事長就任．学生時代の貧しい生活の経験から、無職の若手研究者の研究継続のための道を開く
1973　東京大学定年退官、同大学名誉教授．学園紛争の経験から東方学院設立、学院長就任．デリー大学名誉文学博士．ベトナム・バンハン大学名誉文学博士
1974　比較思想学会初代会長就任．紫綬褒章受章
1975　『佛教語大辞典』刊行 (毎日出版文化賞、仏教伝道文化賞受賞)
1977　文化勲章受章
1978　イギリス王立アジア協会名誉会員．ネパール国王より勲章
1982　ドイツ学士院客員会員
1984　勲一等瑞宝章受章．日本学士院会員就任
1989　松江市名誉市民
1994　第24代史跡足利学校庠主就任
1999　『中村元選集』[決定版] 全32巻、別巻8巻刊行完了．10月10日逝去、享年86歳

無断転載・複製を禁ず

編集・発行　公益財団法人中村元東方研究所

祝辞

溝口 善兵衛（島根県知事）

インド哲学・仏教学の国際的権威である中村元先生の生誕一〇〇年を記念し、その業績を顕彰する記念館が先生ご生誕の地、松江市に創設されますことを、心からお慶び申し上げます。

私が先生のことを知りましたのは大学に入ったころでした。それまでは英語や数学などのいわば受験のための実学ばかりに時間を割いておりましたので、哲学や宗教など生き方を考えていく学問が必要だと感じ、いろいろな本をかじっていくようになりました。そうした中で、中村先生という郷土の大先輩がいらっしゃることを知った次第です。

しかし、購読した先生の本、たとえば、「ブッダのことば　スッタニパータ」「浄土三部経」「般若経典」など、パーリ語などで書かれた古い原典を翻訳されたものは、人生経験の乏しい私には難しく、つっかえつっかえで、いつも中途で脱落し、積ん読という状態でした。

その後、「仏典をよむ」など初心者向けに分かりやすく講義されたものなども出版されてきましたので、少しずつ勉強させていただいているところであります。

こうした先生の数多くの著作の源泉ともいえる蔵書三万冊や資料等が、今般、先生のご遺族から寄贈され、記念館に展示されることとなりました。

先生の研究の足跡を伺い知ることができる貴重な図書が、国内外の多くの専門家の方々に利用されることになることは、先生の郷里松江にとっては大きな誇りになることでしょう。

この機会に、次代を担う青少年をはじめ、多くの県民の皆様が記念館を利用され、先生の偉大な業績に触れられることを期待しております。

終わりに、中村元記念館創設にあたり、公益財団法人中村元東方研究所をはじめ関係の皆様のご尽力に深く感謝の意を表しますとともに、記念館の発展をご祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

松浦 正敬（松江市長）

中村元博士生誕一〇〇年記念事業の一環である中村元記念館の開設に際しまして、一言お祝いを申し上げます。

中村元博士は松江に生まれ、二歳で東京へ移り住まれ、その後松江にお住まいになることはありませんでしたが、生涯を通じて松江出身であることをもって任じ、ふるさと松江を心から愛しておられたと聞いています。中村元博士の業績やお人柄については、私がここで改めて事細かに紹介するまでもありませんが、その足跡と、生涯の研究活動の末に到達されたという「慈悲」の精神、その一端に触れることができる記念館の開設は、専門の研究者だけでなく、一般の市民、ひいては世界中の人々にとって大変喜ばしいことであると思います。

松江市は、京都、奈良と並び、全国に三市ある「国際文化観光都市」の一つであり、小泉八雲の「知られぬ日本の面影」などの著作により知られるまちです。中村元博士は松江市の名誉市民でいらっしゃいますが、この度の中村元記念館の開設により、松江市は同記念館の所在地としても、また中村元博士のふるさととしても、世界に知られることとなるでしょう。そのことは、国際文化観光都市松江にとって新たな誇りとなり、また宝となることでしょう。

中村元記念館が開設されるのは、松江市の東部、中海に浮かぶ、牡丹と朝鮮人参を特産とする大根島です。湖に囲まれ、遠くに中国地方の最高峰大山を望む素晴らしい場所です。また、そこから車で約三〇分、松江市の中心市街地は、宍道湖や、宍道湖と中海を結ぶ大橋川を抱く水の都です。記念館の開設に伴い、記念イベントをはじめ様々な行事が開催されると伺っています。この機会にぜひ一度当地に足をお運びいただければ幸いに存じます。

最後になりますが、中村元記念館と東方学院、その運営に当たられます皆様のますますのご発展を祈念いたしまして、中村元記念館開設に当たりましてのお祝いの言葉とさせていただきます。

無断転載・複製を禁ず

編集・発行　公益財団法人中村元東方研究所

新春研究発表会

二月二十七日（月）、東京都文京区の東京ガーデンパレスにおいて、毎年恒例の新春研究発表会が開催されました。

講演の部では、佐々木一憲研究員が、アジア諸国派遣留学の成果発表の一環として「碧い眼で見出した仏教」と題する発表を行い、続いて、桂紹隆龍谷大学教授が、「中村元先生と論理学」と題する講演を行いました。

本年度の講演には約一〇〇名の参加者があり、会場は満席となりました。参加者は両先生の講演に真剣に聴き入り、メモを取るなど、熱気あふれる講演となりました。

講演に引き続きホテル内で会場を移して、前田理事長の挨拶、原實東京大学名誉教授による乾杯に始まり、和やかな雰囲気の中、懇親会が開催されました。ご列席の今西順吉国際仏教学大学院学長、桶屋良祐金剛寺執事長、山口泰司明治大学教授が祝辞を述べ、奈良康明常務理事による閉会の辞で幕を閉じました。

「中村元先生と論理学」

桂紹隆（龍谷大学教授）

中村元先生は、東西の論理学を比較考察し、東西文化の融合の基盤となる「普遍的な論理学」の構築を目指しておられた。そのことは、没後に出版された『論理の構造』（上下、青土社、二〇〇五年五月／初出『現代思想』一九八五年一月～一九八九年五月、一九九〇年十一月～一九九六年十二月）に添えられた、三木純子様の「著者あとがきに代えて」に引用されている先生のお言葉から明らかである。「現在、すべてがグローバルに地球志向的観点から事が進められ、東西文化の融合ないし総合ということが、大いに唱えられているが、そのための原理が充分に解明されていない。…インド論理学や仏教論理学は〈論理学〉という広い場面の中に論理学的に位置づけられねばならぬ。「文献学的に」ではない。その位置づけの試みは、また新たに〈普遍的な論理学〉という場面を設定することになる。」

インドにおける論理学的営みが西洋人に発見されると、アリストテレス流の三段論法と比較され、二十世紀になるとラッセル流の記号論理学を用いて解釈されるなど、インド論理学は演繹論理として理解されてきた。しかし、精査すると、五～六世紀の仏教論理学者、ディグナーガが登場する以前のインドの論証は本質的に類推（アナロジー）による論証であり、その背後に肯定的随伴（アンヴァヤ）と否定的随伴（ヴィヤティレーカ）にもとづく帰納的な関係発見法がある。J・S・ミルの論理学との類似性は指摘できるが、現代の確率論理とは異なるものである。パースの提唱したアブダクション（説明の論理）との対比も試みられたが、インド論理学を代表するニヤーヤ派の論証形式（主張・理由・喩例・適合・結論）は、数理論理学を強く批判したトゥールミンの論証モデル（主張＋限定詞・根拠・論拠・裏付け）と似ており、後者に触発されたニュー・レトリック（説得の論理）の視点からインド論理学は評価されるべきであると考えるものである。

「碧い眼で見出した仏教」

佐々木一憲（研究員）

十三世紀初頭、仏教はイスラム教徒の軍勢に逐われ、発祥の地インドから姿を消した。拠点が破壊され、指導的者たちが国外に逃れ去ってしまったことで仏教の伝統は途絶え、ほどなく人々の記憶からも消えていったのだ。

そのインドで仏教が復活を遂げたのはようやく十八世紀の後半、しかもそれはヨーロッパ人たちによって、だったのである。当時インドの権益を得たイギリスは、植民地経営のため現地の習俗に通暁することが必要だと考えた。こうして始まったインド文化の組織的な研究が仏教の発掘につながったのである。

この当時、欧州の文人たちの間には書簡や著作物を通じた情報ネットワークが構築されていて、新しい資料や研究成果は、即座に欧州中の文人たちに共有され、目ぼしいものはアカデミーやサロンに集う学界の権威たちの間で論議されて、次第に学問界全体に共有される一つの定説が出来上がっていく仕組みができていた。仏教は「理性的で社会性が強く、主宰神を立てず、それでいて高度な倫理性を備えた宗教体系」と見なされるようになった。歴史的ブッダが想定され、その活動や人となりはしばしばイエスやルターといったキリスト教の聖人になぞらえられた。

キリスト教が支配的な地域で構築されたからであろうか、欧州人が碧い眼で見出した仏教は、キリスト教の信仰と共存させうるよう、哲学や倫理思想というイメージをあえて強調するような傾向があるようだ。この欧風の仏教観が学問的な定説として流布したことで、結果的に、仏教は各人の信仰と切り離して学び、実践できるものとの印象が広まった。そのことが今日における仏教の世界的な流行の要因なのではないだろうか。

東方学院　ご案内

東方学院は、東京本校・関西教室・中部教室で開かれています。来春からは松江教室も開設。一九七三年の設立から、インド哲学や仏教思想などの東洋思想を中心として、講師と受講者である研究会員とが共に学び、共に真理を探究するという理念の下に、現代の寺子屋として発展してまいりました。受講者がお一人でも開講するため、多岐にわたる講座のなかにはマンツーマンで行われる講座も少なくありません。学院の理想に賛同して集まった最高レベルの講師陣が、学歴・職業・年齢・性別・国籍にとらわれず、真に学問を愛する人のために、懇切丁寧に指導にあたっています。現在の研究会員は、現役大学生から九〇歳の方まで、約二〇〇名の方が学んでいます。

東京本校講師陣

関西教室講師陣

中部教室講師陣

【東京本校】

前田專學学院長をはじめとする四〇名ほどの講師陣によって、入門講座から大学院レベルの専門的な講座まで、五〇もの多彩な講座が開かれています。

【関西教室】

二〇名ほどの講師陣が寺社や自宅を教室として、約二十五講座を開いています。年に二回、誰でも参加できる「中村元インド哲学カフェ」をひらいており、気軽に参加できる入口として人気です。

【中部教室】

一〇名ほどの講師陣が寺社や自宅を教室として、約十五講座を開いています。

＊一人でも多くの方にこの集いに加わっていただけますよう、心からお待ちしております。

研究会員の声

東方学院末学の思い

桜井 俊彦

私は、学院が設立された三年後の昭和五十一年から二十四年間、中村元先生の講義を聞いた。それから続いて十三年間は、前田專學先生の講義を受けている。現在では私がもっとも古い研究会員（受講生）らしい。

中村先生の言葉・行動を顧みると、つねに釈尊を崇め、釈尊に聞き、釈尊の道を歩んでおられたと思う。先生亡き後は受講を中止しようと思ったが、先生の遺志を継いで先頭に立って歩まれている前田專學先生の「不惜身命」の姿勢と情熱に打たれ、受講を継続することにした。

前田先生の講義では、テキストとしてご自身の著書とともに中村先生の著書を使われることが多い。中村先生のお気持ちを察しながら、「先生はこんなお気持ちで言われたのでしょう」と話される講義がなんともありがたい。

それにしても東方研究会の講師・研究員の皆さんの頭が低いことに感心する。中村先生や前田先生の謙虚さが、人びとの心にその教えと同時に転入している証しであろう。

中村先生の人柄を想いおこし端的に表すなら、「実るほど頭の垂れる稲穂かな」「下がるほど人の見上げる藤の花」という俳句が最もふさわしい。

東方学院では、各種講座の内容・受講料・お申し込み方法などを記載した『東方学院・受講の手引き』を配布いたしております（無料）。ご希望の場合は、事務局にお申し込みください。

無断転載・複製を禁ず

編集・発行　公益財団法人中村元東方研究所

研究会員の声

わたしは中村先生のおかげです

黒田 大雲

立松和平氏がかつてインドを遍歴されている時、中村先生が翻訳された岩波文庫の『ブッダのことば（スッタニパータ）』を肌身離さず携えていたこと、その後、創作活動を通じて、中村先生から授かった慈しみ溢れるご好意のことなど、ＮＨＫ・ＴＶ番組を通じて知りました。清楚な立松氏の表情と、温かな眼差しで、優しい表情をされた中村先生のご尊顔のシーンが、いまでも強烈に眼に焼きついています。

競争に勝つためには、何をやってもかまわないような業界のサラリーマンをやっていました。若い頃は非思想に生きていて、「切った張った」の勝負も、自分で言うのもおこがましいですが、結構こなしていたと思います。

ところが、四十歳にさしかかる頃になると、「何か変だなあ」と感ずるようになりました。すると、「切った張った」が急に空しく思えてくるではありませんか。気がつくと、中村先生の著作が、私の身の側に積み上がっていました。当然、『ブッダのことば（スッタニパータ）』もありました。

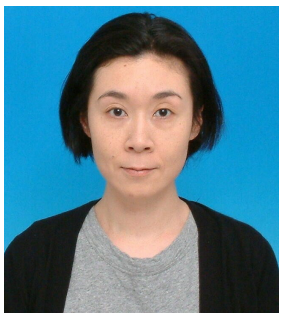
凡そ勉学とは無縁の無学な市井の徒である私にでさえ、兎に角難解であった筈のアーガマのテキストが、何とか理解できたのです。何度も繰り返して読むと、一寸ずつでも理解できるではありませんか。夢中になりました。碩学のお仕事は、世界中の研究者のなかにだけあるのではなくて、それ以外の、数え切れない凡愚の輩にまで浸透していることも、忘れてはならない事であると思います。身をもって知りました。

そして、気がつくと、耳順を越して、東方学院の生徒となって、サンスクリット語を学ぶ自分がここにあります。夢中になって、学ぶ楽しさを喜んでいる、私が一人おります。よちよちと、そのくせ独り歩きを楽しみ乍ら『ヒトーパデーシャ』と取り組んでいます。夢中になっています。茨田先生のおかげです。こうして、仏道のことや、慈悲のことや、学ぶことの楽しさなどを指し示し、機会を与えてくださった中村先生。私は先生のおかげです。

研究員紹介

一研究員のこれまでとこれから

金子 奈央



平成二十年度から東方研究会に所属し、禅宗における叢林生活を規定する清規文献を研究対象としています。大学時代からの専攻は宗教学で、仏教学の専門教育を受けたことはありませんでしたので、採用のお知らせを頂いた時は本当に驚きました。

稽古や学習による人間の変容に興味のあった私は、大学時代には岸本英夫の修行研究などを読むようになりました。世阿弥の稽古修業論が自らの研究の出発点となりましたが、その後仏教関連文献が研究対象になろうとは当初全く考えもしていませんでした。

日本の宗教学では戦前からの岸本英夫の研究を嚆矢として、修行研究の蓄積がありましたが、心理学や身体論的アプローチが中心で、法的側面からの研究は薄いと感じていた時に、道元が自らの僧団のために撰述した生活・修行の規定―清規―の存在を知り、仏教の基礎的知識もないまま恐いもの知らずで、清規文献を大学院での自らの研究テーマとすべきだと半ば直観的に決めてしまいました。

いかなる制度や規範の中で、人間は宗教者となり生活してゆくのか、という視点で禅宗清規を読解しています。「法規範」と聞くと無味乾燥に響きますが、記される規範や罰則の背後に、共同体内の人間の行動が見え隠れしているのにも大きな魅力を感じます。例えば、元代の『勅修百丈清規』には、結夏前に参加僧侶の名簿を掲示する方法が記されますが、その項目には、私的感情等から気に入らない僧侶の名前に墨塗りしあって喧嘩に及べば追放に処す、という罰則規定が添えられます。初めて読んだ時には思わず「ど、どこの中学の話か…」と思ってしまいましたが、僧侶が修行生活を送る叢林もまた多くの人間が肩を寄せ合う共同体の一つなのだなと、逆に人間らしさを強く感じたのを覚えています。

文献学の何たるかも知らずに開始した研究ですので、歩みは遅いですが、出来る限り厳密に文献を読むことを心掛け、粘り強く歩んで行きたいと考えています。

無断転載・複製を禁ず

編集・発行　公益財団法人中村元東方研究所

平成二十四年上半期 行事報告

・一月十四日（土）
第六回中村元インド哲学カフェ
「ヨーガの世界～古典から現代へ～」（於:大谷大学）

・二月七日（火）
東方学院中部教室拡充イベント
平岡昇修先生「中村先生と東大寺お水取り」
小久保シュヴァ先生「インドの舞踊と美術」
（於:同朋大学）

・二月二十七日（月）
新春研究発表会（→四頁）（於:東京ガーデンパレス）

・四月八日（日）
鎌倉・鶴岡講座開始～
「中村元『真理のことば』を読む」
（於:鶴岡八幡宮境内）

・六月十日（日）
中村元博士生誕一〇〇年記念講演会
佐々木閑先生「これからのインド仏教学」
（於:キャンパスプラザ京都）

・七月二十一日（土）
第七回中村元インド哲学カフェ
「ヨーガの世界～仏教とヨーガ～」（於:大谷大学）

・八月四日（土）
第四回神儒仏合同講演会
「神儒仏に期待するもの」
神道・山村明義先生
儒学・本田哲夫先生
仏教・菅原伸郎先生
（於:神田明神）

＊詳細は当研究所ホームページをご覧ください。

研究員総会

六月十八日（月）東京都千代田区にある学士会館において第六回研究員総会が開催されました。この総会は当研究所の更なる発展のため、研究員が一同に会し交流を深めつつ互いに意見交換を行うことを目的として企画されたものです。

当日は約三十名の研究員が出席し、前田理事長の挨拶に始まり、執行部より研究員に対する通達・要請事項が伝えられました。また、その後、研究会の運営などについて研究員間で活発な議論が交わされました。

平成二十三年度 芳名録（五十音順・敬称略）

維持会員

赤井士郎　足利学校事務所　今西順吉　小笠原勝治　風間敏夫　金田泉　川崎信定
久間泰賢　黒川文子　小坂機融　小島岱山　金剛院仏教文化研究所
在家仏教こころの研究所　斉藤敬　清水谷善圭　釈悟震　(株)春秋社
淳心会(目野紹運)　末廣照純　菅原信海　鈴木一馨　髙崎直道　高松孝行　田辺和子
田村晃祐　千葉よし子　中央学術研究所　千綿道人　角田泰隆　法清寺　奈良康明
西岡祖秀　羽矢辰夫　仏教伝道協会　前田專學　前田式子　松本照敬
丸井浩　三木純子　水野善文　三友健容　三友量順　武蔵野大学　安本利正
渡邊信之　渡邊寶陽　法恩寺(藤原敏文)　吉田宏哲

賛助会員

秋葉佳伸　阿部敦子　有馬頼底　石井義長　一島正真　石上智康　遠藤康　岡崎英雄
小笠原隆元　荻山貴美子　奥住毅　奥田聖應(清明)　小野俊彦　加藤妙子　桂紹隆
金田静江　菅野博史　北村彰宏　木村清孝　久保田磯子　小林節子　小峰立丸
小山典勇　近藤良一　斎藤明　佐久間留理子　桜井瑞彦　桜井俊彦　定方晟
島田外志夫　浄土真宗東本願寺派本山東本願寺　須佐知行　鈴木勇介　大海修一
高橋審也　田上太秀　武田浩学　立花ひろ子　田中良昭　田丸淑子　田丸守也
田村久雄　鶴谷志磨子　(株)展勝地(軽石昇)　(財)徳育経営研究会　戸田裕久　鳥山玲
長野市南長野仏教会　中村久夫　中村保志孝　中山静麿　成田山新勝寺　西尾秀生
西川高史　西宮寛　日本ヨーガ学会会長(田原豊道)　日本ヨーガ禅道院(石田祐雄)
花岡秀哉　引田弘道　日隈威徳　久富幸子　福留順子　福士慈稔
身延別院(藤井教公)　藤田宏達　藤山覚一郎　法雲寺(水谷浩志)　堀江順司　堀越教之
松野純孝　薬師院(松原光法)　松村淳子　松村恒　水野善朝　森祖道　山本文渓
由木義文

東方学院後援会

今宮戎神社　大神神社　奥田聖應　(学)清風学園　加藤公俊　古泉圓順　坂本峰德
四天王寺　四天王寺大学(森田俊朗)　高口恭典　瀧藤尊淳　健代和央　塚原昭應
塚原亮應　出口順得　出口隆順　唐招提寺　東大寺　念法真教教団　平岡英信
廣瀬善重　南谷恵敬　宮崎光映　三宅光雄　森田禅朗　森田俊朗　吉田明良
山岡武明

御寄付

岡信美　小野基　片山一彦　門脇英晴　(財)克念社　親鸞仏教センター
シンリョー(比良竜虎)　田辺和子　千葉孝男　鳥山玲　中田直道　念法眞教(桶屋良祐)
念法眞教金剛寺　(財)仏教伝道協会　松久保秀胤　三友量順

皆様からのご支援に心から御礼申し上げます

会員参加へのお願い

公益財団法人中村元東方研究所からのお知らせ

当研究所では各種会員制度を設け、随時募集いたしております。会員には、機関誌『東方』をはじめとする各種情報の提供が受けられる普通会員と、当研究所への支援を主な目的とする賛助会員、ならびに維持会員がございます。

◇ 普通会員 ◇　年会費 ７千円

普通会員の皆様には、毎年一回発行される機関誌『東方』の他、当研究所主催の各種行事および会合等に関するご案内をお送りいたしております。

◇ 賛助会員・維持会員 ◇　賛助会費 １口 １万円 ・維持会員 １口 ５万円

当研究所では賛助会員ならびに維持会員を募集いたしております。当研究所の趣旨にご賛同頂ける皆様からのご協力をお待ちいたしております。なお、募金の趣旨をご理解の上、できうるかぎり複数口のお申し込みを賜りたく存じます。なお、当研究所は、内閣総理大臣から「公益財団法人」として認可を受けておりますので、ご寄付金額が２千円を超える場合には、その超えた金額が所得控除の対象となります。

＊ 詳細は公益財団法人中村元東方研究所事務局までお問い合わせください。

公益財団法人の認定

この度、かねてより努めてまいりました公益財団法人の申請が、内閣府より平成24年6月27日付けで認可されました。これに伴い、7月2日付けをもちまして、従来の「東方研究会」より「中村元東方研究所」へと名称を変更することになりました。

本年は創設者中村元博士の生誕100年の記念すべき年でもあり、これはひとえに皆様方のご支援ご指導のたまものと衷心よりお礼を申し上げます。

これを機に中村元博士の創設の原点に立ち戻り、生きた学問としての東洋思想の研究およびその成果の普及に、より一層精進してゆく所存でございます。今後とも温かいご支援ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

公益財団法人 中村元東方研究所　（旧称：財団法人東方研究会）
理　事　長　前田專學
常 務 理 事　奈良康明
事務局長代行　三木純子

東方だより 第二十号（平成二十四年十月十日）
編集／発行 公益財団法人中村元東方研究所
【事務局】〒一〇一-〇〇二一
千代田区外神田二-十七-二 延寿お茶の水ビル四階
TEL 〇三-三二五一-四〇八一

ホームページ開設（ http://www.toho.or.jp ）

・当研究所の目的・理念・歩み
・中村元博士の略歴・業績・著作文献目録
・東方学院（開講科目、講師紹介、著書紹介）
・当研究所（研究成果、研究員紹介、著書紹介）
・公開講座、イベントのお知らせ
・リレーエッセイ
・チャットの広場
・パブリックリレーションズ　等

様々な情報が随時公開されていますので、是非ともご覧ください。